⑤薪割り、薪積み

薪割りというと、まさかりを使ったあの薪割りを思い浮かべますが、正直あの作業を幼児に提供するのはかなり難しく、危険です。最近は「手動式油圧薪割り機（剛腕君）」なるものがあります。タイヤ交換などに使うような油圧ジャッキとくさびの間に薪を挟み、レバーで圧力を高めていくと薪が割れる、という道具です。これだと、幼児でもかなりの量の薪を効率よく、安全に割ることができます。最初は大人と一緒に使い、むしろ大人側にその理屈と操作方法を伝えます。すると、何度か作業を進めていくうちに、子どもが見よう見まねでその操作を覚えていきます。

次に使うのが、「キンドリングクラッカー」と呼ばれる薪割り道具です。まさかりの葉の部分が上むきに固定されており、そこに薪を入れて上から薪をハンマーで叩くという道具です。
ハンマーで叩く、という行為が、先ほどの油圧式薪割り機よりもエネルギーを直接薪に伝えている感覚が高くなり、またその割れる感覚が気持ちを高めます。またこの道具は、薪をかなり細く割ることができるので、焚きつけづくりなどに適しています。①の焚火との連動性が高くなります。

割った薪を積み上げる、という作業はとっても辛く、大変です。しかし、何故大変かというと、これを一人とか少人数でやるから大変なのです。それがたとえ幼児でも、大人数がいるとあっという間に終わります。④のように、一輪車やリヤカーで薪を運ぶことは、幼児にとっては声かけ次第では「誰かの役に立つ楽しい遊び」になります。また、薪小屋まで大人も子どもも一列に並んでバケツリレーのように薪を運ぶと、幼児にとっては「なんだか大人の仲間入り」をしたような気持ちになるようで、その一体感を楽しみます。そして、あっという間にうず高く積まれていく薪壁を見ると、成果が実にわかりやすく、達成感を感じられます。さらに、トラックに薪を積

んで運搬する場面においては、トラックの荷台での積み込みは子どもたちにお願いします。狭い荷台の上は、大人よりも子どもたちの方が小回りが効き、効率的に薪を積むことができるからです。

　このように、子ども達の手によって乾いた薪が潤沢に蓄えられると、最初は現場にガスバーナーやガスコンロを持ち込んでいた大人も、次第に薪を使って煮炊きをするようになります。化石燃料を使うよりも楽であり、暖かく、人が集うという本来の里山で普通にみられた風景が戻ってきます。

⑥ごっこ遊び、チャンバラ、ナイフワーク

このように、その場における生理的欲求や安心安全の欲求、そこにいる誰かに認められるという欲求が満たされるようになると、子どもたちはだんだん想像やイメージを駆使して遊ぶようになります。大人が遊んであげなければいけないとか、指導者が何か活動を準備しなければいけないという提供型ではなく、自分の中からわき起こるイメージで自分自身を楽しませるという自立型に変わっていきます。

つまりそれが「文化」「芸術」誕生の瞬間でもあります。それは「おままごと」という内側にエネルギーを向けるような小さな見立て遊びから、「チャンバラ」のようなエネルギーを外側に放出するような遊びまで、様々です。ここまでくると、指導者や大人の介入はグッと減ってきます。ハラハラしながら、外側で見ているだけになるでしょう。ただ、チャンバラなどはややもすると人の集まる場所で始まることがあります。しかし、これが屋内であるとすぐに「ストップ」なのですが、森の場合は別です。人が集う場所から離れたところで存分に棒を振り回してもらえばそれで問題なしです。そして、チャンバラをやっている様子をよくみていると、別に人を思いっきり叩きたいわけではなく、木と木がぶつかって、それこそチャンチャンバラバラと音や刺激が体に伝わってくることを楽しんでいるようです。そういう意味では、なかなか折れない生木よりも、ボロボロに枯れ果てた木や枝を使う方が楽しいようです。もちろん、使い終わった後の枝は薪小屋に積み上げます。

そうである分にはいいのですが、だんだんエスカレートしていく場面が見受けられるのも事実。その辺のジャッジは、指導者の腕の見せ所です。かといって、ヘルメットを被らせて「ヘルメットの上からガンガン叩いてもいいよ」というジャッジはないと思いますので、その加減は近くにいる大人でしっかりと共有しておく必要があります。技術的には、真冬の雪の上で、スキー

ウェアや防寒着をしっかり着込み、手袋、毛糸の帽子やスキーゴーグルなどを装着した上で戦うのは少し安心してみていられます。夏は風呂敷を使い、忍者の頭巾のように顔を覆い、水泳のゴーグルなんかを使って「お前たちは忍者だ」とか言いながら、子どもたちのイメージ遊びを刺激しながら前向きなマネジメントを施す、という方法があります。

余談ですが、このようなイメージ遊びを幼児から小学生にまで昇華させていくと、彼らはナイフを使って「木刀」を作り始めます。削り馬を駆使してそれはそれは美しい木肌を生み出し、最後は焚き火で炙って表面を炭化させ、さらに丈夫なものを作ったり、キンドリングクラッカーを駆使して短刀を作ったり、まさに文化を生み出していきます。

ここでやっと、ナイフや削り馬、あるいは鋸という刃物が登場してきます。それぞれの刃物の使い方、使わせ方、をここで書いてしまうとものすごい量になるので割愛しますが、刃物を使わせ始める最初の場面で大切なのは「刃物を置く場を明確にする」「しっかりと片付ける」「順番待ちをしない」の３つに集約されます。どうしても最初は指導者がその使い方を指導・管理することになります。最初は、刃物と刃物を使っている子どもの様子が十分に視認できる状況を作り、目がしっかり行き届く作業場を作ることが重要です。そして、子どもの刃物のによる怪我の最大の原因は「集中力が切れる」です。刃物を使っているうちに握力がなくなり、手が痛くなります。

そして、次の遊びに目が行きます。あるいは早くやりたいのに「順番待ち」と言われ、まだ自分の番が来ないとイライラしている時に、必ず刃物で怪我をします。それを認識した上で、今目の前にいる子どもは、何分ぐらい集中できるのか、指導者である自分が、適切な場を設定することで何人まで目を行き届かせられるのか、という２つのマトリクスから導き出させるナイフシーンを作ることが重要です。このプロセスを十分に理解し、技術と握力が備わって、子どもたちは自分でナイフを持ち、森の中で自分の判断・責任でナイフを使うことができるようになります。

ここまで来ると、森林整備の可能性がさらに高まります。手足で折ることしかできなかった森の木を、「もっといい木刀を作りたい」というモチベーションを生かし、のこぎりで切り出してくることができます。まさに間伐作業、の始まりであり、子どもたちによる里山保全の真骨頂でもあります。

⑦プレーパークという手法

大切なのは、ここまで書かれてきた様々な手法を、幼児に対して「一斉指導・一斉保育」のひとつとして「強制する」「全員に同じことをさせる」という学校教育的なアプローチで展開していけない、ということです。これはとても重要なポイントです。もちろん、幼稚園・小中学校の学指導要領に基づいてやる場面も作ることはできますが、それは一面的なものであり、森林整備の場面においては本質的ではないと考えています。

森のようちえん、を使った森林整備であるので、基本的には「自分の責任で自由に遊ぶ」という「プレーパーク」という理念と手法がベースになります。指導者によるある程度の管理はありますが、それは介入ではなく、あくまでも最低限の見守り、というスタンスのもと、子どもたちには

・どれをやってもいい
・どれもやっていい
・どれもやらなくていい
・どこかに行くときは一声かけて

という「４つのど」を保障すべきであると考えています。特に幼児における発達段階や特性を考えると、このスタイル以上の現場手法はないと考えます。

じゃあこれを具体的にやってみると、面白いことが起きます。子どもたちが現場にいる様子を見ると、一見全員がバラバラに好き勝手なことをやっているように見えるでしょう。全然管理・コントロールされていない無法地帯に見えるかもしれません。しかし、この誰も指示していない状態こそ「自律的に自分を楽しませている」状態であると思いますし、この状態にまで引き上げることが（特に３つ目がとても重要）、指導者の仕事だと思います。さらに、子どもたちがめいめい勝手にやっている活動や遊びが、これまで述べてきたような意図を持ち、全てその森林の整備につながっている、という俯瞰したデザインを意識し、全体を導いていく必要があります。

（４）その効果が生み出した「次」

このような､森のようちえんを活用した森林整備を 10 年近く続けてみました｡月に１回程度、３０人程度の日帰りの親子活動を年間 10 回ですから、トータル 100 回ですね。

・その辺をより多くの子ども達が歩き、遊びまわることで踏圧が進み、下草刈りをする回数と面積が激減した
・最初の頃にはみられなかった多様な草本が出現するようになった
・枯れ木や危険木が取り除かれ、安全度が高まった
・風通しが良くなり、大量の蚊が発生しなくなった
・病気の木が減った

と、森林生態学的な科学的根拠のない経験則ではありますが、森林環境が向上した実感を持つようになりました。まさに里山的な「使うことで管理される」シーンが出現したといえます。

次に、そんな森林整備をすることでおきた人的現象です。

・お母さん達が、お弁当ではなく食材を持ち込むようになり、お昼ご飯を焚き火で作るようになった
・お母さん同士が仲良くなっていき、コーヒータイムやフリーマーケットが充実してきた
・大した広報をせずとも、口コミや SNS で人が集まるようになってきた
・少しずつお父さん達も参加するようになり、一人で黙々と焚き火の番や薪を割るようになった
・それをみていた子ども（他所の子）に、薪割りを教え始めた
・お母さんがスタッフ側に回るようになった

子どものために連れてきていた森が、気がつけば大人の居場所にも変容していきました。しかもかなりの遠方から集まるシーンも見られるようになりました。地域別というより、目的別のコミュニティが形成されています。